

令和元年度

事業所名： むらさき苑かまど わの家

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0372101105		
法人名	社会福祉法人 西根会		
事業所名	むらさき苑かまど わの家		
所在地	〒028-7112 岩手県八幡平市田頭第24地割36番地		
自己評価作成日	令和元年9月10日	評価結果市町村受理日	令和元年11月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

建物が法人の中庭的なところにあり、利用者がゆったりと散歩や外気浴を楽しむことができる。職員の年齢層が幅広く、広い視野で意見を出し合う事ができている。また、利用者との関わりにおいても各年代で話題や、利用者へ教えてもらう事などよい関わりが出来ていると思う。職員が利用者についても業務の事でも、各々気が付いたことを意見として提案しやすい雰囲気が職場内に出来ている。また、出された提案に対して、全職員が共通認識を持って取り組むことが出来ている。実践したことに対するモニタリングも出来ている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_022_kan:true&amp;JiyosyoCd=0372101105-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search">http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action=kouhyou_detail_022_kan:true&amp;JiyosyoCd=0372101105-00&amp;ServiceCd=320&amp;Type=search</a>
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

同一法人が運営する特別養護老人ホームを本部にデイサービスセンターとともに併設され、かまど(分家)として、併設事業所と連携を取りながら、利用者が職員と輪になって安心と信頼のもとで生活していけるよう、日々、介護サービスに努めている。介護度の高い人が特養に移るなど、ここ1年で5人の利用者が入れ替わり、また、本年度は、管理者も含め4人が異動したことから、新しいコミュニケーションづくりに努め、半年を経過して利用者、職員とも、落ち着いた雰囲気の中で生活出来るようになってきている。利用者同士の会話は和やかで表情も明るい。併設事業所合同の避難訓練では、地域の方々が「地域災害協力隊」として参加するなど、法人全体が地域に受け入れられ、協力や支援を得ている。新たな「我(輪)の家」づくりを目指し、介護サービスの質向上に取り組むこととしており、今後は、認知症への理解や支援方法を地域に伝える活動等も期待される。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和元年9月27日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 ○ 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている ○ 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が ○ 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が ○ 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

令和元年度

事業所名：むらさき苑かまど わの家

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を毎朝申し送り時に唱和する事で共有し、意識づけして実践に繋げている。	職員は、毎朝の唱和で共有を図りながら、理念に掲げる「和やかに話声の聞こえる我が家」づくりを目指し、職員のコミュニケーション力を生かして、日常的に声掛けを増やし、会話を通じて利用者との間に安心と信頼の関係が築かれるよう努めている。	理念の実践に向けて、日々、介護サービスに努めていますが、具体的に分かりやすい目標を定め、利用者と職員が一緒になって、理念に掲げる“我が家”づくりに取り組むことを期待します。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	近隣や法人のお祭りやコミセンの行事に参加している。GHの行事には近隣の保育園児や運営推進会議の委員にも参加してもらい、交流している。市内の中高校などの学生のボランティアや職場体験の受け入れをしている。	地域の中心部に立地している利点等を背景に、法人主催の夏祭り等への地域の方々の招待、コミュニティーセンターのお祭りへの参加、保育園、小・中学校の児童、生徒の来訪による交流等が行われている。管理者は、現在の交流を大切にしながら、地域とのより自然な形での「おつきあい」のあり方に腐心している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の行事に参加する事で、認知症の方々のふれあい方を自然に伝えることが出来ていると思う。運営推進会議の活動として認知症の講演会に参加している。ボランティアや職場体験を受け入れて交流を図り、理解を広げられるように努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	GHでの活動や生活の状況報告、事故報告などを行っている。委員からは質問を受け、説明をしている。助言や意見も頂いている。	運営推進会議の開催場所を、別館から利用者の見えるホーム内の多目的室に変え、管理者の他、職員も交代で出席するように改善した。委員は利用者の暮らし振りや職員のケアサービスの様子を身近に見ながら、質問や意見を活発に出してくれるようになり、地域密着型サービス施設としてのグループホームへの委員の理解が深まっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議や入所判定会議のメンバーに市職員も含まれており、情報を提供してもらったり、わの家の状況を説明する機会がある。包括主催の地域ケア会議に参加し、情報を得ている。	市の担当課職員からは、運営推進会議の委員として様々な意見、提言をもらい、また地域包括支援センターとして、事業所の入居判定会議に参画し、地域に根差した適切な助言を行ってくれる。窓口での手続きや各種研修、会議を通じながら市と密接に連携している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束廃止委員会を定期、または必要時に行っている。定期的に事業所内研修を行い、職員各自「身体拘束をしない介護」についてスピーチロックも含め、日々意識した行動を取っている。玄関の施錠は夜勤帯時間に防犯のために行っている。	身体拘束適正化に関し、指針は法人が定め、委員会、研修はホーム独自に設定、運営し、「アンガーマネジメント」等のテーマを決めて研修を行っている。帰宅願望の強い利用者が、時計を気かけたり、落ち着かなくなるサインを見逃さないように見守っている。夜間の起床把握のため、家族の了解の下で床置きセンサーを使用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修や、事件・事故の情報を文書で回覧し、周知している。アンガーマネジメントなど職員自身の感情コントロールの手助けになるような研修を行い、虐待を招くことがないように努めている。介護量が過重になりそうな状況の時には職員が自然に声を掛け合い、助け合っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度についての資料はいつでも見られるようになっている。現在制度を利用している方はいないが、必要時にはいつでも支援できるように、制度について学ぶ機会を作っていくたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	問い合わせの時点から入所までの流れや入所後の生活について説明し、相談に応じている。困っていることや疑問についてよく話を聞き、理解、納得してもらえるように努めている。不安やわからないことがある時にはいつでも連絡してもらえるようお知らせ文書には必ずわかりやすい場所に電話番号を記載している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日頃から利用者や家族の話に耳を傾け思いを理解し、職員間で共有したうえで、ケアやGHの運営に反映できるように努めている。運営推進会議や入所判定会議などで話す機会がある。苦情受付窓口を重要事項説明書に明示し、GH内にも掲示している。	利用料を直接事業所に納入する形にしているため、来訪する家族から要望等を聴ける機会は多い。家族からは、洗濯物たたみのお手伝いをさせたい等、ホームでの暮らし方に関する意見や要望が多い。管理者は、「協力し合って生活していくため、その人にあつた役割をお願いしている」ことなどを家族に説明し、理解を得よう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議や申し送り時だけでなく、日常的に意見や提案、または試行の結果についても随時話し合い、意見が反映されている。常に意見や提案を出しやすい環境になっている。	職員数が拡充され、職員の行動、思考に少しではあるがゆとりが出来、日頃の介護を振り返った意見・要望を出しやすい職場環境になってきている。「連絡ノート」を中心に意見や提案が出され、介護度の高い利用者の昼食時間の延長、給湯設備等の修繕が迅速に行われている。厨房のリフト機能の修理や車の導入要望が出されており、検討することとしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	今年度4月の定期異動で人員の補充があり、有給休暇も取れるようになり、個々が余裕を持って働けるようになってきた。外部の研修にも行けるようになった。気になることがあった時は、管理者に相談している。正職員登用の資格要件基準が明確に示されていないことに意欲を失っている職員がいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内研修の他、個々の職員の質の向上が図れるように外部の研修を受けることができるようになった。個々の立場や経験に合わせた研修に行くことができている。代表者は正職員登用の資格条件を明記するなどして職員のスキルアップの意欲を持たせるような取り組みをしてほしい。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	交流を持つ機会を特別に設けてはいないが、外部の研修会や、地域ケア会議への参加などで、交流をする機会がある。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に本人と面談し、意向を伺い、GHIについての説明をしている。ケアマネや医療関係者、家族からも情報の収集をし、利用者について理解を深めるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	困っていることや要望を聞く他に、質問にも一つ一つ丁寧に答えるようにしている。また、今までの介護の大変さなどを話される方も多いので、共感の姿勢でゆっくりお話を聞くようにしている。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前の情報をもとに入所時の対応を決めておくが、入所後の観察記録の内容をもとに随時変更・試行を重ね、その方に合った支援を見つけるようにしている。また、その都度職員間で情報の共有をしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	申し込み時や面談時にGHの特性を説明し、協力し合って生活することについて理解を頂くようにしている。事前の情報や入所後の観察から利用者のできることや興味のあることを把握し、職員や他の利用者に関わり合いながら生活できるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入所時にご家族と協力しあって支えていくことを説明している。GHでの状況は随時お知らせし、家族と色々相談しながら支援している。体調不良時の対応など相談し、付き添いはできる限りお願いしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	GH近辺の行事だけでなく、各々の出身地域の行事にも参加するようにしている。面会者にも気軽に来ていただけるように声がけしている。自宅訪問やなじみのある地域へのドライブもしている。	出身地域の公民館行事やお祭りには、出来るだけ出かけ、一人でも多くの知り合いの方に出会えるよう支援している。毎月延べ20人前後の来訪者があり、知人、友人等には、その都度、再訪をお願いしている。隣接のデイサービスセンターの利用者と交流している利用者も複数いる。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係を把握し、会話が弾むように席を配置したり工夫している。意思の疎通が難しい時には職員が間に入ったり、職員からの声掛けを増やすように努めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用終了後も必要に応じ、相談に乗っている。他施設でお会いした時にはお声がけしている。長期入院での退所の方の再申し込みに応じている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	折に触れ意向を伺いながら対応している。日常生活や会話の中からもその方の思いや希望をくみ取る努力をしている。	日常のコミュニケーションを通じ、また表情や行動から、利用者個々の意向を汲み取っている。冷暖房の好み、お菓子作り、買い物、ドライブ等の希望など、把握した思いや意向は、連絡ノートに記録して職員間で共有し、可能なものは出来るだけ早く実現できるように努めている。パンの好きな人には、月2、3回は朝食にパンを用意し、おやつも複数から選べるよう配慮している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族からの情報提供をもとに、センター方式を活用し、把握に努めている。家族関係の多様化から聞き取りが困難な方もいて把握が難しいこともある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	個々の記録や申し送りを確認し、把握に努めている。気づきの情報を職員間で共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当職員だけでなく、他の職員の意見も聞きながら計画を立てている。モニタリング、立案、意見交換を繰り返し、現状に即した計画の作成につなげている。家族の意見は反映されているが、利用者との話し合いをもう少し深めていく工夫をしていきたい。	管理者の下で、交代でその日1日を統率する「日勤リーダー」を決めており、リーダーが作成したケース記録(生活記録)や各居室担当が作成した毎月のモニタリング記録をもとに、6か月毎に計画の評価を行い、見直しが必要な場合は、本人、家族から同意を得て計画の変更を行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の状況や生活の様子を個別の記録に残し、内容を確認しあって計画に反映させている。状態の変化や気づきがあった時には情報を共有できるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の状況に応じ、受診や入院の支援など相談し、対応している。家族状況の多様化に伴い、柔軟な対応に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コミセンや地域の学校、保育園などの協力を得ながら、イベントへの参加や慰問など楽しむ機会を作れるように支援している。 社協の協力を得て生活保護の利用が可能になったケースがあった。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	これまでの主治医を基本としつつ、希望者には月1回の訪問診療を家族の同意を得て受けられるように支援している。診療時には個々の状態を情報提供し、医師の説明や薬の情報を頂いている。体調不良時の受診時は普段の様子と受診までの経過の記録を情報提供している。訪問歯科診療を利用している方もいる。	利用者全員が、協力医である国保病院医師による定期的な訪問診療を受診しており、その際には、法人の看護師も立ち合い、手伝ってくれる。同病院では、これまでのかかりつけ医とも連携を取ってくれ、適切に受診が来ている。歯科についても、必要な場合には、訪問診療を受診できる体制にある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業所内に看護師の配置はないが、利用者に気がかりなことがある時には、対応の仕方や受診の必要性など含めて相談している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院時は医療機関へADLやそれまでの経過などの情報提供を行っている。入院中は経過や退院の見通しなどを定期的に看護師やケースワーカー、家族と情報交換している。退院時は留意点や薬の内容など説明を受け、スムーズにGHでの生活に戻れるように努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	事業所の設備や人員配置(看護師の配置がない)について説明している。入所時や介護保険の認定更新のタイミングなどで重度化した時の方針などを個々に話し合っている。連携医療機関の医師や相談員と必要に応じて相談できる関係を築いている。	看取りの必要性は認識しているが、ベッド、浴槽等の設備面や看護師配置がないなどの体制面から、現状では看取りは難しい旨、利用開始時に本人、家族に説明している。通常、事業所での食事摂取が困難になった場合には、家族の意向も確認して医療機関へ移送する手続きを取っている。職員に看取りの経験者がいないこともあり、外部研修の受講等を進めながら、今後の看取りの方向性について検討したいとしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルはあるが、定期的な実践的訓練は行っていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に1度の総合避難訓練とその他火災1回、水害1回の訓練を行っている。総合避難訓練では地域災害協力隊や運営推進委員の参加もある。	運営推進会議委員も参加し、同一敷地内の他事業所と合同の総合避難訓練を実施している他、ホーム独自に火災、水害対応の訓練を実施している。合同の訓練には、地元の「地域災害協力隊」10数名が協力してくれる。日中だが、夜間想定訓練も行っている。管理者は、災害発生時に役立つよう、日常生活の中でも取り組み可能な訓練を工夫し、実施したいとしている。	合同、単独での訓練に加え、例えば、非常口となる洗濯物干し場から散歩に出かけるなど、非常時の動きが体得できる方法等を取り入れながら、繰り返し、ミニ訓練を行うことが望まれます。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	法人研修などで対人援助について学んでおり、常に個々の人格や自主性を尊重した丁寧な対応を心掛けている。特に入浴や排泄時の声掛けやプライバシーの保持には気を付けている。	制止言葉は使わないよう、また、利用者に待ってもらう際には「これがすんだら行きます」等の受け答えにより、人格を尊重し、気持ちを思い遣った対応を心がけている。家族には写真撮影やその他の個人情報の取り扱いについて予め了解を得ているが、外部から利用者に関して照会があった際には、必ず家族の意向を確認して対応している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が希望を話したり自分で決めることができるように、個々に合わせた声掛けをするように心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	できるだけ一人一人のペースに合わせた過ごし方をさせていただけるように支援しているが、職員の数にも限りがあり、全てを希望通りには対応できていないのが現状である。レク活動やおやつなど利用者の希望を聞きながら進めている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	入所時には自宅から手持ちの衣類を持ってきていただいている。自分で選んだ物を自力できがえしているかもあるし、職員が手伝う時も聞きながら決めている。職員と衣類の買い物に行くこともある。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は業者委託の為利用者との献立を決めたり、作ったりはしていない。食前にメニュー紹介をしている。おやつ作りでの簡単な調理や枝豆もぎ、トウモロコシの皮むきなど皆でやっている。後片付けやテーブル拭きは利用者の役割となっている。庭でプチトマトや枝豆を育て、おやつや食事に盛り付けている。	副食等は受託業者が隣接する特養の厨房で調理し、事業所は、主食のご飯と汁物のみを用意している。菜園で収穫したトマトや枝豆が追加で食卓に上っている。利用者の希望に沿って、焼きそばやお好み焼き等、自分達で手作りの昼食やおやつを楽しむこともある。外食も取り入れるなど、柔軟に対応している。3人の利用者が食器洗いや食器拭きなどのお手伝いに参加している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は業者委託の為、栄養計算されたものを提供している。必要に応じて個々に合わせた大きさに切って提供している。ソフト食を提供することもできる。食事摂取量を記録し、必要量を摂れているか確認している。水分を摂りたがらない方にはお茶やジュースをゼリーや寒天にして提供することで食べていただけている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後歯磨きの声掛け、介助を実施しているが、自力で行っている方の口腔内の観察まではできていない。水分でむせ込みのある方は口腔ケア用のウエットティッシュを使用し、ふき取りを行っている。毎晩就寝時に義歯の浸け置きをして消毒している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の状況を記録することにより個々の排泄パターンを把握し、適切な支援に繋げている。	全員が布パンツ、リハビリパンツ、パットとそれぞれ使用しながらトイレを使用している。失敗することが少なく尿意が明確な利用者について、新人職員の提案で布パンツを勧め、リハビリパンツから改善した例がある。夜間も全員が自分で起きてトイレを使用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便状況の観察を行っている。体操を行ったり、外気浴を兼ねた散歩に出たりして、体を動かす機会を作っている。便秘傾向のある方には水分補給を兼ねた寒天ゼリーの提供をしている。主治医に相談し、便秘薬が処方された時には本人の生活リズムに合わせて内服時間を調整している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	勤務時間の都合上ある程度のスケジュールは立てているが、本人の体調や希望に合わせて調整し、無理強いすることなく、気分良く入浴できるように支援している。現在は入浴が嫌いな方はいないが、拒否が続き清潔保持ができないことがないように、声がけなど工夫するようにしている。	週2回、月曜から木曜の午後3人ずつ、時間をかけ、おしゃべりしながらゆっくりと入浴を楽しんでもらっている。頭と背中では職員が手伝い、その先は半分程度の利用者は自分の手で出来ている。全介助は1人のみとなっている。着替えは、お風呂当番の職員が利用者用に用意を促している。異性介助も問題ない。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	就寝時間、消灯時間は決まっていない。個々に自宅での習慣やその日の体調などに合わせて休んでいただいている。日中も気分や体調に合わせて自室で臥床したりリビングソファで転寝をして過ごしている。日中に寝すぎて夜に眠れなくならないように、日中の活動量にも気を付けている。室温や明かりの調整をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服薬については処方都度全員が説明書を見て内容を確認している。変更があった時にはその後の様子を観察し、次の受診に繋げている。服薬チェック表を活用し、誤薬や飲み忘れのないように支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日常生活の中で個々の好きなことや興味、力に合わせた家事仕事などの役割を持っていただいている。ごみ捨てや野菜の収穫なども天気に合わせて行っている。季節の行事を取り入れたり、散歩やドライブなどで気分転換を図っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	日常的には外気浴や散歩など支援している。その他、希望時に自宅や買い物などに職員と一緒に出掛けている。職員から誘って出かけることもある。行事として花見や外食、紅葉狩り、買い物ツアーなども行っている。家族と一緒に自宅へ行ったり、墓参りに出かける方もいる。	利用者は、広い敷地内を散歩しながら外気浴を楽しんでいる。買い物の希望があれば、1対1で職員が付き添って市内のドラッグストアや衣料品店に出かけている。八幡平方面の花見など季節毎にドライブしているほか、2、3人の利用者を連れて近傍へ出かけるなど、出来るだけ外出の機会を作っている。最近入居した利用者は、家族に連れられ、春に蒔いた野菜の収穫に頻繁に出かけている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在はお金の自己管理ができる方がいないので、預かり金として金庫で管理している。外出時や夏祭りの時など使えるお金があることを伝え、欲しいものを選んでもらい支払いの支援をしている。預かり金の収支については毎月家族に確認していただいている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援している	希望時には、事務室にある電話を使うことができる。コードレスなので職員や他者を気にすることなく話すことができる。携帯電話の持ち込みも出来、かけ方がわからない時には支援もしている。手紙についても利用者宛のものは本人に渡し返事を出す支援もしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室入口に表札があり、自分の部屋がわかるようになっている。建物が道路から離れたところにあるので、静かな環境である。できるだけ混乱を招かぬように努めている。共用の場に利用者で作った季節感のある作品を飾っている。玄関先や中庭に花を植え、くつろぎの場から花を眺めることができる。	南面の洗濯干し場を含め、中庭を囲むように居室が配置され大きな「輪」を形作っている。東西の回廊には、それぞれ畳敷きの小上がりが設けられており、利用者の日向ぼっこの場所になっている。回廊の北側にある天井の高いホールは、柔らかな色調に統一され、更に、キッチン、事務室、運営推進会議が開かれる多目的室に接しており、職員は何処にいても利用者を見守ることが出来ている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂のテーブル席やソファ、多目的室の他、家事室と廊下の小上り(2か所)の畳敷きのスペースなど、思い思いに過ごすことができる場所がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に使い慣れたもの、本人のこだわりのものを持参していただくようにお話している。心穏やかに過ごせるように、面会時などに写した家族との写真や本人の笑顔の写真をA4サイズにして居室に貼っている。	10畳近くもある居室には、ベッドと大きな押し入れ、吊戸棚、洗面台が備え付けられている。窓に代わるサッシ戸は家族の同意を得て施錠されているが、万が一の際の非常出口の役割も果たせる。各部屋には、「長寿のお祝いの日」に、唄など、利用者それぞれが得意とする事を讃え、事業所から贈られた感謝状が飾られている。自分の居室をモップ拭きする人もおり、清潔で気持ちの良い居室になっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の表札やトイレの表示をして、自分の行きたいところがわかるようにしている。手摺を各所に設置し、安全に移動できるようになっている。カレンダーを各居室や共用の場に貼り、食堂には日めくりの曆も設置し、日にちを意識して生活できるように工夫している。		